

平成14年度成人看護学実習指導に対する学生評価

星野礼子*, 内海知子, 大浦まり子, 橋田由吏, 細原正子, 斉藤静代

香川県立医療短期大学

Assessment of adult nursing practice classes by students in fiscal 2002

Reiko Hoshino, Tomoko Utsumi, Mariko Ooura,
Hashida Yuri, Masako Hosohara, Shizuyo Saito

Department of Nursing, Kagawa Prefectural College of Health Sciences

Abstract

To improve instructions in nursing practice, we analyzed the results of students' assessment of instructions in adult nursing practice (fiscal 2002) according to the clinical stage for practice (early stage, late stage) and the practice semester (first semester, second semester).

Of a total of 92 students who performed adult nursing practice in a 3-year course college, 89 from whom consent for this study was obtained were enrolled. For the evaluation, the "Class process assessment scale-for nursing for nursing practice -" was used. Obtained answers were analyzed according to the above clinical stage for practice and the practice. The unpaired t-test and statistical analysis software SPSS were used for analysis.

Comparison between early stage practice and late stage practice showed no significant differences in any of 10 subscales. Comparison between practice in the first semester and that in the second semester showed a significant difference in [V. Expectations and requirements for students]; the results were significantly better in the second semester than in the first semester.

The students considered that they had good relationships with patients and could be effectively involved in the staff by cooperation among the students irrespective of the clinical stage for practice or the practice semester. On the other hand, irrespective of the clinical stage for practice or the practice semester, the students had difficulty in understanding the goals/tasks of practice, and their assessment results were poorer for the cooperation and consistency in instructions between instructors and nurses than for the other items. In the future, instructors should guide students in clarifying their goals, and nursing practice should be performed while communication between instructors and nurses is deepened.

Key words : 実習評価 (Training evaluation), 実習時期 (the training time),
成人看護学実習 (adult science of nursing training),
急性期実習 (acute stage training), 慢性期実習 (chronic stage training)

* 連絡先 : 〒 761-0123 香川県木田郡牟礼町原 281-1 香川県立医療短期大学看護学科

* Correspondence to: Department of Nursing, Kagawa Prefectural College of Health Sciences,
281-1 Hara, Mure-cho, Kita-gun, Kagawa, 761-0123, Japan

はじめに

近年、大学において多元的評価の重要性が問われている¹⁾。そのひとつに、学生への教育が効果的かつ質的に高い状態で行われているかどうかを評価する指標として、学生による授業評価が多くの大学で導入されている²⁾。

看護学においても看護学実習は、力動的である臨床現場を授業の場としているために不確定要素が多く、また教員がすべての実習場面に立ち会うことができないこともあり、学生が授業についてどのように捉えているか、教育者として評価をうけることが特に重要となってくる。

本学の成人看護学領域では、平成13年度の実習開始初年度より、学生による授業評価を取り入れて実習指導の改善を行ってきた³⁾。平成14年度成人看護学実習では、すでに妥当性・信頼性が検証されている舟島らの「授業過程評価スケール—看護学実習用—」⁴⁾を用いて、学生による授業評価を行った。

そこで、成人看護学実習に対する学生による授業評価について、経過別（急性期実習と慢性・終末期実習）および実習時期別（前期と後期）で分析し、実習指導改善の示唆を得ることを本研究の目的とした。

成人看護学実習の概要

1. 実習目的と目標

成人看護学実習は、成人期にある対象を理解し、対象に応じた看護が実践できる能力を養うことを目的としている。急性期実習では、急性の経過をたどる患者及び家族に対して、科学的視点に基づいたアセスメント能力の養成及びそれに関連した看護技術の習得、苦痛の緩和、早期回復に向けての援助方法を理解することを実習目標としている。また、慢性・終末期実習は、慢性の経過をたどる患者及び家族に対して、セルフケア確立への援助方法を理解し、さまざまな健康障害や疾病と共存をはかること、また、終末期にある患者の全人的苦痛の理解やQOLをふまえた援助方法を理解することなどを実習目標としている。

2. 実習方法

1) 急性期実習について

主として手術療法を受ける患者を1～2名受け持ち、術前・術後における看護過程を展開する。

受け持ち患者は、開腹術（胃・腸疾患）および乳房・肺・甲状腺の手術を受ける成人を原則とする。実習期間は、外科病棟での実習3週間、手術室・ICUでの見学実習1週間の、4週間である。そのうち、毎週月曜日を帰校日とし、学内での周手術期看護に必要な看護技術演習や看護過程の展開に関する指導を行う。

カンファレンスは、実習部署で臨地実習指導者の同席のもと週1回行うが、それ以外は教員と学生のみで、主に術前術後の看護という教員が指定したテーマに沿って実施している。

2) 慢性・終末期実習について

生涯コントロールを必要とする慢性期の患者もしくは終末期の患者を1名受け持ち、看護過程を展開する。実習期間は、内科病棟での実習3週間、腎センター、放射線部、内視鏡部での見学実習1週間の、4週間からなる。そのうち、毎週月曜日を帰校日とし、学内での演習や指導を行う。カンファレンスは、主に日々の患者との関わりの中での気づきなどから学生自身がテーマを決め、実習部署で臨地実習指導者の同席のもと毎日行う。

3. 成人看護学実習における指導体制の実際

実習期間中は、原則的に教員が臨床に常駐して教育にあたる「現場常駐型」⁵⁾の指導体制をとっている。教員は、各グループに対し毎日1名が指導にあたり、1グループには実習期間を通し2名が交代で指導にあたっている。臨床には部署毎に臨地実習指導者が3～4名おり、交代で学生の実習指導にあたっている。教員は、臨地実習指導者と連携を持ちながら実習教育の計画・実施・評価すべてにおいて責任を持つ。

研究方法

1. 調査期間

平成14年4月～11月。

2. 調査対象

上記期間に、成人看護学実習を行った学生のべ92名のうち、研究協力への同意が得られた学生89名（内訳：急性期43名と慢性・終末期46名、前期45名と後期44名）。

3. 倫理的配慮

対象者に研究目的・方法、所要時間、自由意思に

よる参加, 実習評価には一切関係しないこと, 無記名で良いことを説明し, 書面で同意を得た. 対象者が特定されないように, 調査票と同意書は別途に所定の袋に入れてもらい回収した.

4. データ収集

グループ毎に実習終了日に研究者より研究の目的・方法を説明し, 自由意志により回答を求めた. 測定用具は, “授業過程評価スケール-看護学実習用-” (下位尺度 10 項目について, 42 質問項目を実施した. 方法は, 1: 全く当てはまらない~5: 非常に当てはまるで答え, 1~5 で得点化する尺度である) を, 開発者の許可を得て用いた.

10 の下位尺度は, 【I. オリエンテーション】 (オリエンテーションの内容の適切性など 2 質問項目数である), 【II. 学習内容・方法】 (実習における学生の学習内容・方法の適切性の程度など 6 質問項目数である), 【III. 学生-患者関係】 (実習における学生と患者とのコミュニケーションの程度など 2 質問項目数である), 【IV. 教員, 看護師-学生相互行為】 (教員や看護師の学生に対する対応の適切性など 14 質問項目数である), 【V. 学生への期待・要求】 (教員や看護師が学生に期待する行動の難易度と学生の期待レベルの一致など 2 質問項目数である), 【VI. 教員, 看護師間の指導調整】 (教員と看護師間の指導の一貫性と連携の適切性の程度など 2 質問項目数である), 【VII 目標・課題の設定】 (実習展開過程における目的・目標の明確さなど 3 質問項目数である), 【VIII. 実習記録の活用】 (実習指導における記録物活用度など 2 質問項目数である), 【IX. カンファレンスと時間調整】 (実習の開始・終了や休憩時間に対する調整の適切性など 4 質問項目数である), 【X. 学生-人的環境関係】 (学生同士, 学生と教員及び看護師, 患者などとの相互行為の円滑さなど 5 質問項目数である) で構成されている.

5. 分析方法

得られた回答について, 急性期実習と慢性・終末期実習の経過別および前期と後期の実習時期別にそれぞれ分析を行った. 検定には対応のない t 検定を用い, 解析には統計解析ソフト SPSS 11 J for windows を用い, 有意水準は 0.05 とした.

結 果

1. 経過別 (急性期実習と慢性・終末期実習) によ

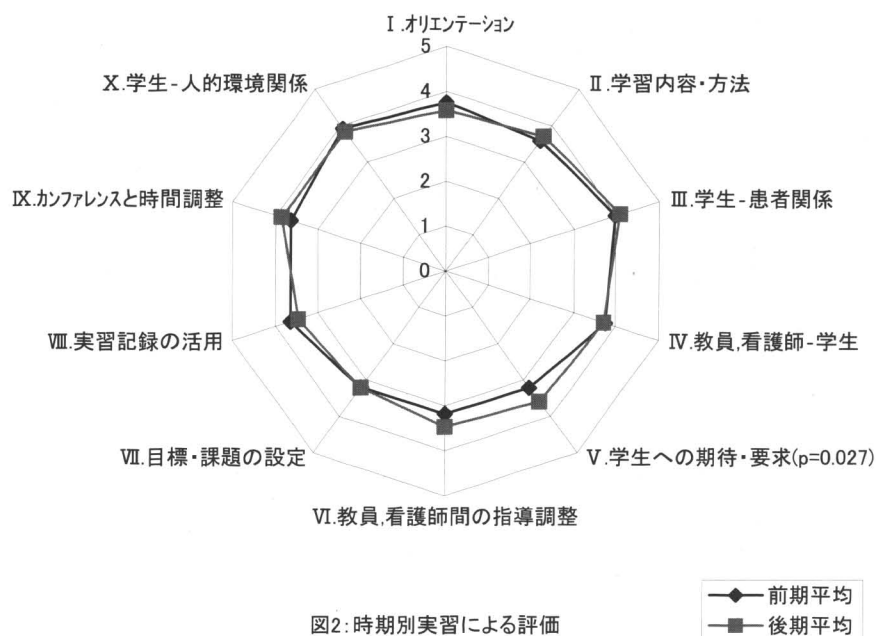
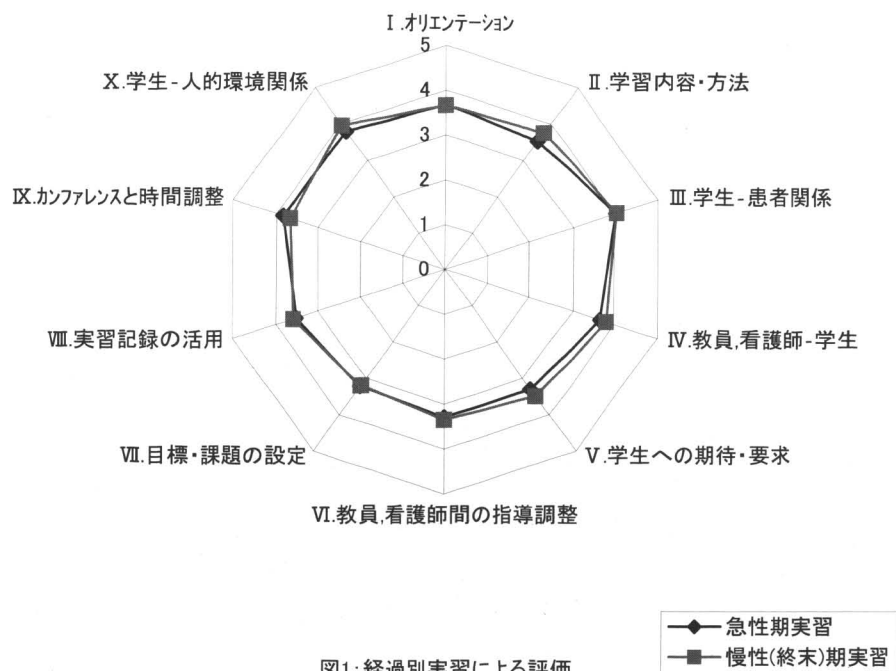
る比較

急性期実習 (43 名) で得点が高かった下位尺度は, 【III. 学生-患者関係】 (4.04 ± 0.83 : 平均点 \pm 標準偏差), 【IX. カンファレンスと時間調整】 (3.85 ± 0.68), 【X. 学生-人的環境関係】 (3.80 ± 0.68) であった. 42 質問項目別にみると, 最も得点が高かったのは, 「学生同士が協力し合うことができた」 (4.21 ± 0.94) 【X. 学生-人的環境関係】であり, 「患者とのコミュニケーションを深めながら実習を展開していた」 (4.05 ± 0.87) 【III. 学生-患者関係】, 「受け持った患者の看護を中心に実習を展開できた」 (4.02 ± 0.86) 【II. 実習内容・方法】, 「患者との関係を築きながら実習を展開していた」 (4.02 ± 0.89) 【III. 学生-患者関係】の順であった.

一方, 得点が低かった下位尺度は 【VII. 目標・課題の設定】 (3.22 ± 0.70), 【VI. 教員, 看護師間の指導調整】 (3.30 ± 0.74), 【V. 学生への期待要求】 (3.30 ± 0.81) であった. 42 質問項目別にみると, 得点が最も低かったのは, 「実習中の記録物・提出物のなどの量は適切であった」 (2.67 ± 1.13) 【VII. 目標・課題の設定】であり, 「教員や看護師は, 提出した記録物を用いて指導・説明をしていた」 (3.23 ± 1.04) 【VIII. 実習記録の活用】, 「教員や看護師の学生に対する質問の量は, 多すぎることも少なすぎることもなかった」 (3.28 ± 0.91) 【V. 学生への期待要求】, 「教員や看護師の指導の間に一貫性があった」 (3.28 ± 0.77) 【VI. 教員, 看護師間の指導調整】の順であった.

同様に, 慢性・終末期実習 (46 名) で得点が高かった下位尺度は, 【III. 学生-患者関係】 (4.05 ± 0.83), 【X. 学生-人的環境関係】 (3.96 ± 0.65), 【IV. 教員, 看護師-学生相互行為】 (3.81 ± 0.65) であった. 42 質問項目別にみると, 最も得点が高かったのは, 「学生同士が協力し合うことが出来た」 (4.42 ± 0.69) 【X. 学生-人的環境関係】であり, 「受け持った患者の看護を中心に実習を展開できた」 (4.26 ± 0.85) 【II. 学習内容・方法】, 「教員と学生間のコミュニケーションは良かった」 (4.20 ± 0.75) 【X. 学生-人的環境関係】の順であった.

得点の低かった下位尺度は 【VII. 目標・課題の設定】 (3.20 ± 0.67), 【VI. 教員, 看護師間の指導調整】 (3.35 ± 0.74), 【V. 学生への期待要求】 (3.49 ± 0.81) であった. 42 質問項目別にみると, 最も得点が低かったのは, 「実習中の記録・提出物などの量は適切であった」 (2.98 ± 0.86) であり, 「目的目標が明確に伝わる展開の実習であった」 (3.20 ± 0.81) 【VII. 目標・課題の設定】, 「教員や看護師の指導の間



に一貫性があった」(3.33 ± 0.87)【VI. 教員, 看護師間の指導調整】の順であった。

なお, 急性期実習と慢性・終末期実習の比較では, 10 下位尺度全てにおいて有意差はみられなかった(図1)。

2. 実習時期別(前期と後期)による比較

前期実習(45名)で得点が高かった下位尺度は,

【III. 学生-患者関係】(3.99 ± 0.85), 【X. 学生-人的環境関係】(3.92 ± 0.75), 【IV. 教員, 看護師-学生相互行為】(3.76 ± 0.73)であった。42 質問項目別にみると, 最も得点が高かったのは, 「学生同士が協力し合うことができた」(4.34 ± 0.81)【X. 学生-人的環境関係】, 「受け持った患者の看護を中心に実習を展開できた」(4.16 ± 0.88)【II. 学習内容・

方法],「教員と学生間のコミュニケーションは良かった」(4.16 ± 0.95)【X. 学生-人的環境関係】の順であった。

一方、得点が低かった下位尺度は、【VI. 教員, 看護師間の指導調整】(3.18 ± 0.81), 【VII. 目標・課題の設定】(3.20 ± 0.80), 【V. 学生への期待・要求】(3.21 ± 0.89)であった。42質問項目別にみると、最も得点が低かったのは、「実習中の記録物・提出物のなどの量は適切であった」(2.84 ± 1.04)【VII. 目標・課題の設定】、「教員や看護師の連携がよくとれていた」(3.13 ± 0.81)【VI. 教員, 看護師間の指導調整】、「教員や看護師の学生に対する質問の量は、多すぎることも少なすぎることもなかった」(3.16 ± 1.00)【V. 学生への期待・要求】の順であった。

一方、後期(44名)で得点が高かった下位尺度は、【III. 学生-患者関係】(4.10 ± 0.81), 【IX. カンファレンスと時間調整】(3.87 ± 0.68), 【X. 学生-人的環境関係】(3.83 ± 0.57)であった。42質問項目別にみると、最も得点が高かったのは、「学生同士が協力し合うことができた」(4.30 ± 0.85)【X. 学生-人的環境関係】、「受け持った患者の看護を中心に実習を展開できた」(4.14 ± 0.85)【II. 学習内容・方法】、「教員と学生間のコミュニケーションは良かった」(4.11 ± 0.84)【X. 学生-人的環境関係】の順であった。

得点が低かった下位尺度は、【VII. 目標・課題の設定】(3.21 ± 0.55), 【VI. 教員, 看護師間の指導調整】(3.47 ± 0.63), 【VIII. 実習記録の活用】(3.47 ± 0.81)であった。42質問項目別にみると、最も得点が低かったのは、「実習中の記録・提出物などの量は適切であった」(2.82 ± 0.97)【VII. 目標・課題の設定】、「教員や看護師は提出した記録物を用いて指導・説明をしていた」(3.34 ± 0.99)【VIII. 実習記録の活用】、「目的目標が明確に伝わる展開の実習であった」(3.39 ± 0.72)【VII. 目標・課題の設定】、「教員や看護師の指導の間に一貫性があった」(3.39 ± 0.65)【VI. 教員, 看護師間の指導調整】の順であった。

なお、前期と後期の比較では、【V. 学生への期待・要求】で有意差($p = 0.027$)がみられ、後期の方が前期よりも有意に高値であった(図2)。

考 察

急性期実習と慢性・終末期実習の経過別での比較において、授業評価に影響を及ぼす要因は、患者の健康レベルの相違、指導する教員や各実習部署の看護

師の教育観などが考えられる。

まず今回の結果では、両者において下位尺度で有意な差はなかった。急性期実習と慢性・終末期実習の授業評価が同じであったことより、両者の授業の質6)が同等であったということが考えられる。

さらに、両者とも【III. 学生-患者関係】や【X. 学生-人的環境関係】が高かったことより、対象患者の健康レベルが異なっているにもかかわらず、学生は良好な患者関係を維持できたと評価していたと考えられる。また、異なる実習部署でも常に学生同士が協力し合うとともに、指導する教員や各実習部署の看護師の配慮があることで、患者やスタッフとうまく関わることができたと評価していたと考えられる。

一方、両者とも【VII. 目標・課題の設定】と、【VI. 教員, 看護師間の指導調整】が低かった。【VII. 目標・課題の設定】については、慢性・終末期実習では、患者の状態に著明な変化がないため、目標課題が設定しにくいことが考えられる。急性期実習では、学習範囲が手術療法を受ける患者を受け持つと限定されているため、実習目的・実習目標や、学習課題とその必要性が伝わりやすいと考えられるが、今回の結果より、実習目標や学習課題を明確に伝える工夫が必要であると示唆された。【VI. 教員, 看護師間の指導調整】については、両者ともに、複数の教員や看護師が関わることにより連携と指導の一貫性が難しいことが考えられた。今後、教員間および教員と看護師間で、実習指導に関する話し合いを深めていくとともに、多様な考え方があることを学生自身に理解させたうえで、自分の考えが持てるような指導を行う必要があると考える。

実習時期別で授業評価に影響を与える要因は、学生の信念・価値観・態度・資質⁷⁾を含めた学習度の深まり、グループダイナミクスの形成程度、実習環境への適応などが考えられる。前期と後期の比較により有意差がみられたものは、【V. 学生への期待・要求】であり、後期のほうが前期に比較して授業評価が高かった。これは、教員・看護師の学生への期待・要求度は後期のほうが高くなるが、学生に対する質問の多少や行動の難易について学生がより応えられるようになっていることが窺えた。このことは、学習度の深まりの一つと考えられた。

また、実習時期に関係なく、【III. 学生-患者関係】【X. 学生-人的環境関係】の得点が高かった。【III. 学生-患者関係】については、学習度にかかわらず学生は患者と良好な関係が維持できたと評価していたと考えられた。

結 論

舟島らが開発した「授業過程評価スケール－看護学実習用－」を用いて、平成14年度の成人看護学実習の授業評価を行った結果、以下のことが示唆された。

1. 経過別（急性期実習と慢性・終末期実習）の比較で、授業過程評価10下位尺度全てにおいて有意差はみられなかった。
2. 実習時期別（前期と後期）の比較で有意差がみられたものは、【V. 学生への期待・要求】であり、後期のほうが前期に比較して有意に評価が高かった。
3. 経過別（急性期実習と慢性・終末期実習）や実習時期（前期と後期）に関わりなく、患者と良好な関係を持つことができ、学生同士が協力し合い、スタッフとうまく関わる事ができたと評価していた。
4. 経過別（急性期実習と慢性・終末期実習）や実習時期（前期と後期）に関わりなく、記録・提出物の量が多く、実習目的・目標・課題が伝わりにくい傾向にあり、教員、看護師間の指導の連携と一貫性についての評価が他に比べ低かった。
5. 今後の課題は、記録物・提出物の再検討、目標・課題を実習中も繰り返し意識づけるなどの工夫、教員・看護師間の指導に関する話し合いを深めていくことである。

文 献

- 1) 中教育審議会（2002）大学の質の保証に係る新たなシステムの構築について・大学院における高度専門職業人養成について・法科大学院の設置基準等について（答申），p1-5.
- 2) 佐藤春吉，千賀康利，林昭，細井克彦編（1999）“大学評価と大学創造－大学自治論の再構築に向けて－”，東信堂，東京，p88-89.
- 3) 内海知子，大浦まり子，星野礼子，細原正子，斉藤静代，古川文子（2002）成人看護学実習指導に対する学生評価．第33回日本看護学会論文集－看護教育－日本看護協会，p144-146.
- 4) 舟島なをみ，杉森みどり編著（2000）“看護学教育評価論”，文光堂，東京，p46.
- 5) 藤岡完治，安酸史子，村島さい子，中津川順子（1996）“学生と共に創る成人看護学実習指導ワークブック”，医学書院，東京，p41.
- 6) 前掲書 4)，p45，p49.
- 7) Kathleen B.Gaberson, Marilyn H.Oermann（1999）"Clinical Teaching Strategies in Nursing", Springer Publishing Company, U.S.A. [勝原裕美子訳（2002）“臨地実習のストラテジー”，医学書院，東京，p21.]

受付日 2003 年 11 月 4 日